7　指宿地域の特色を生かした稼げる肉用牛産地の育成

畜指宿地域の特色を生かした稼げる肉用牛産地の育成

成果の要約

1　ドローンによる立毛播種によって 21ha 作付けされた。畑で作っていた自給飼料の余剰が地域内マッチングによって流通され，地域内自給率の向上に活用された。
2　新規就農者２戸でバーンミーティングを行い，改善した飼養管理を地域に普及した結果，セリ出荷子牛の商品性が大きく改善し，発育・価格ともに県平均に改善した。

1　対象

（1）指宿市肉用牛農家　84 戸

2　課題を取り上げた理由

（1）繁殖めす牛頭数は，平成 26 年まで減少していたが，関係機関一体となった増頭推進の結果，増加傾向に転じていた。しかし，近年の物価高騰と円安による輸入飼料の大幅な高騰が続く中，子牛相場が急落し，肉用牛農家の経営状況は非常に厳しくなっており，急激な頭数減に転じている。高齢化と後継者不足による労力不足も顕著になっている中，省力的な自給飼料の増産による生産コストの改善が喫緊の課題となっている。

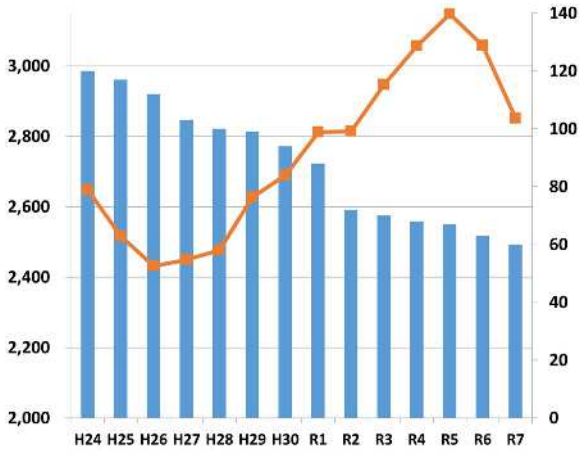


図１　生産者と繁殖めす牛頭数の推移

（2）指宿子牛市場は隔月で開催されていることで，出品される子牛の斉一性が低く，県内の主要産地と比較して平均価格が安値で推移している。

また，子牛のセリ市出荷時の体重や１日当たり増体量（日齢体重）も県内主要産地と比較して低く，子牛育成技術の改善が必要である。

特に規模拡大や新規就農者など技術が安定していない農家に対して畜産ＩＣＴの導入や農場マニュアルの作成などによる技術の安定化が必要である。

3　活動の内容及び成果

（1）　自給飼料確保支援

ア　スマート農機を活用した飼料作体系

前年度実証したドローンによるソルゴーの立毛播種の普及推進を行った。

令和 7 年度の立毛播種面積は 21.5ha となり，畜産農家が作付けするＷＣＳの約６割で作付けされた。収量は通常の植替え体系と同等であった。一方９月の長雨による湿害やＷＣＳの刈り遅れによる生育不良が一部見られたため，次年度は複数のドローン受託会社で作業を分担し，より天候に合わせて立毛播種を実施し，湿害時にはドローンによる追肥を行うなどを検討する必要がある。



写真１　ドローンによる立毛播種の様子

イ　飼料生産組織設立支援

開聞地区の水田による自給飼料生産で，作業受託による外部化の検討を進めた結果，Ｒ８年から，播種作業と防除作業において作業受託を行う農家を作ることができた。

今後は安定的な受託を支援しながら，コントラクターの経営が安定できるように，受委託の仕組み作りに取り組んでいく。

自給飼料の地域内マッチングについて農家巡回を行い，需給の調査を行い，マッチングシステムへの誘導を行った。今年度は約４０ｔのロールが地域内で流通された。次年度以降は立毛播種技術なども活用しながら自給飼料の増産を推進し，更なる流通に繋げていく。

（２） 肉用牛管理技術の改善

ア　子牛商品性向上

新規就農者を対象に，畜舎でのバーンミーティングによる課題整理や改善案の検討，指導農業士による現地研修等を行い，管理技術習得への支援を行った。子牛管理については生後３か月間の管理に重点を置き，観察方法や異常発見時の対処法などの習得を指導した。また，繁殖管理についても代謝プロファイリングを実施し，飼養管理の改善を図った。



写真２　指導農業士による現地研修会の様子

子牛セリ市成績を分析しながら，出荷体重と価格の関係性を説明し，商品性の高い子牛出荷について広く指導を行った。また，バーンミーティングで得られた改善方法について技術員で共有し，広く普及を行った結果，令和５年に比べ，発育のいい子牛の出荷割合が大きく増え，発育・価格とも県平均まで改善した。



図１　子牛セリ市の体重の分布と価格の推移

イ　肥育技術向上支援

肥育一貫経営における枝肉重量改善の対策として，肥育前期に高たんぱく飼料を添加する試験を行った。試験区の枝肉重量成績は対象区に比べ去勢で 27 kg/頭改善され，1 頭当たりの売上が約 6 万円向上した。



写真３　肥育技術検討会の様子

４　今後の課題

（１） 低コスト・省力的な自給飼料増産

ドローンによる立毛播種技術の確立と更なる普及を目指しながら，播種，追肥等の作業受委託の仕組みを構築する。

（２） 飼養管理技術の改善

繁殖管理について，代謝プロファイリングを活用し，長期不受胎牛の改善や分娩間隔の短縮を目指す。

肥育管理について，瑕疵の発生率を調査し，地域の課題を整理し，改善を目指す。

５　担当した普及職員（〇はチーフ）

〇高橋，林